慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	眞福寺本遊仙窟考勘記
Sub Title	
Author	奥野, 信太郎(Okuno, Shintaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.14, No.4 (1936. 3) ,p.117(655)- 151(689)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360300-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

眞福寺本遊仙窟考勘記

奥野信太郎

(一)

張文成の作と稱せられる唐朝小說遊仙窟は已に漢土に佚して本邦にのみその傳來を保つたといふ點に於て、夙に楊守敬が日本訪書志を箸錄するにあたりこれを會眞記に比して紹介してゐる。(卷八)

但し楊守敬が披閲したるは如何なる本であつたかは不明ではあるが想ふにそれは慶安板若くは元祿板の刊本であつたのではあるまいか。何となればその文中遊仙窟の注に關して云々してゐる箇所を見るに、いづれもそれは刊本に施されたる注に就いて言をなしてゐるからである。支那人の本書に關する智識は近きこの數十年來を出でないものであり、從つて未だ古鈔本に及んでゐないのはもとより當然のことであらう。翻つて我國に於けるその沿由は、萬葉集の筆に入りては山上億良が沈痾自哀文にその名を留め、遊於松浦河序の文章的骨骼を成し、またいみじくも和げられて家持が夢のあひは苦しかりけりの調べと

なりし古は暫くこれを措くとしても、日本國見在書目別集家の部に遊仙窟一、と見えてより歴世親み多き書として多く人の耳目に觸れ來つた。唐物語の一條は名だたることながら、大儒掖齋が考證の用に立てしことはその箋注和名類聚鈔と共に不朽の逸事なるべく、又、古事記傳には卷六相論の條以下、卷三十四宇禮豆玖の條に至る間すべて七箇條の引用があり、些々たることながら近世解釋の學に遊仙窟が深き淵源をなしたことの證ともならう。更に海錄（卷十四）膾餘雜錄（卷五）鹽尻（卷八十二）梅園日記（卷五）屋氣野隨筆（百八條）嘉良喜隨筆（卷四）保敬隨筆（百七十五條）と近代隨筆類中に零れ散りたる說話の數々を拾ひゆけば、搖曳する藻の暗きに明るき貝の光をもとめるに似て此處彼處或はその傳授に、或はその訓點に、遊仙窟の語られたるを見ることができる。わたくしの最も好む一代の酒落人淺野梅堂がその寒檠璅綴（卷二）に同じく遊仙窟を語つてゐるが如き、說の當否は論ぜず亦その祕櫃中該書ありしを知つて喜ばしく感じられる。また江戸時代讀本の類に遊仙窟の名を冠したるあり、さては地理の書なる京二重織留（卷三）には奇瑞を語りて遊仙窟に及ぶなど、その汎く至るところ片々たる短篇なるを以ての故に一層われわれの驚きを大にするに足るのではあるまいか。しかるにこの遊仙窟にして傳本の數を求める時その數の多からざることはまことに意外の感無き能はない。今試みにその現存するものを擧げて見るならば、古鈔本としては康永三年書寫正安二年原本なる醍醐寺本、文和二年書寫眞福寺本、及び恐らく室町時代と推定される成簀堂本の三種があり、刊本としては文保三年四月文章生英房序の慶

安五年板、及び慶安板に附するに和文の解釋を頭書としたる元祿板の二種がある。なほその他に澁江抽齋、森枳園共著の經籍訪古志（安政三年）の卷五、小說類の條に遊仙窟一卷、舊鈔本、昌平學藏として毎半面八行、行十五字、注雙行、末尾に英房跋ある一本と、舊鈔本、容安書院藏として體裁前本に同じく但し毎半葉九行、行十五字なる一本とを擧げてゐる。この後者には特に抽齋の有、後に枳園の架藏に歸せし由を注してゐる。しかし遺憾ながら經籍訪古志所載のこの二本は今は全くその所在を詳かにしない。ここに一つ注意しておきたいことは、醍醐寺本にも、眞福寺本にも文保三年文章生英房の序なるものが無いことである。但し醍醐寺本の末尾にある「右此書者」云々の跋が發展して諸本の所謂文章生英房の序なるものに敷衍されたと推定される點から見れば純粹に無序本と見られ得るものは眞福寺本そのものである。（醍醐寺本の跋語が次第に說話的潤色を經て文章英房序に發展して行つた經過についてはわたくしは別に一說を出したいと考へてゐる。）

從つて眞福寺本と、醍醐寺本慶安板（元祿板をも含む）並びに經籍訪古志に記されたる舊鈔本中の一種卽ち昌平學藏本の遊仙窟とは尠くともその根本に於ては異系統の本であるといふことを確認しておかなければならない。なほ實際慶安板に就きて見るに文保三年四月十四日授申圓禪菴序畢、文章生英房と記されながら跋文の位置におかれてあり、經籍訪古志記すところの昌平學藏本の條にも明かに跋と記されてあるのは恐らく慶安板の底本たりし舊鈔本並びに同系統の本と想像される昌平校の舊鈔本が共に序

を跋語の位置に轉置したためであつたかと考へられる。

幸島宗意の倭版書籍考（元祿十五年）卷七にも「遊仙窟、一卷あり、（中略）文保三年文章生英房の跋語あり」と記載して更に問題にしてゐない。しかも英房の序が跋語の位置から再び序文の位置に換置された元祿三年板上梓後にして猶且此言ありである。元祿板の訂正は正しい爲業であつたといへよう。

さて一言に遊仙窟本を有序本と無序本とに二大別したものの果して無序本卽ち眞福寺本と他の有序本系統の本とは如何なる點に於て異るか、更に醍醐寺本なり、眞福寺本なりを分析して見てその一つ一つに數多の異本の湊合を見ることなきか等重要な問題が夥しく殘されてゐる。そこでわたくしは未だ何人も手を染めてゐない眞福寺本の內容を檢覈してこの貴重なる根本資料の姿を報告し併せて以上の問題の一部に觸れて見たいと思ふのである。

眞福寺遊仙窟は經籍訪古志に「文和二年鈔本、尾張眞福寺藏」と記されてあるのがそれであつて醍醐寺本の書寫康永三年（一三四四）から見れば文和二年（一三五三）は之に後るること九年であり、醍醐寺本の原本日付正安二年（一三〇〇）に後るること五十三年、また慶安板の底本たりし舊鈔本（文保二年（一三一八）に後るること三十五年となる。しかし眞福寺本が如何なる舊鈔本を底本として轉寫せしものなりやが分明ならざる以上この計算は確立し難い。但し種々なる點より見て醍醐寺本の原本正安二年より古き鈔本を底本としたとは考へられない。そこでわたくしはできる限り精細に醍醐寺本並びに慶

安板とこの眞福寺本との對校を行ふを以て最も當を得たことと信じる。

(二)

眞福寺本遊仙窟は縦六寸七分、横五寸、楮紙に書寫したものであつて全部で五十一紙、粘葉綴である。表紙も同じ楮紙で遊仙窟一卷、賢智と題し、裏表紙はこれを缺いてゐる。

第一紙に『尾張國大須寶生院經藏圖書寺社官府點檢之印』とこれは方朱印にて捺され『寺社官府再點檢印』とこれは丸朱印にて捺されてある。

全五十一紙のうち最後の三紙は爛して破損あり、毎半葉六行、行十四行、オコト點は全部朱である。奥書には文和二年九月廿四日於加州能美郡板津庄今添中嶋大日寺學所書寫畢とある。蓋し、賢智と署したるは大日寺學所の僧であらう。

先づ最初に毎葉順を追ふて眞福寺本中の著しく醍醐寺本と慶安板と異つてをる漢字並びに訓を列擧してゆくことする。從つて此に擧げてある事項は全く兩書に共通せざる眞福寺本遊仙窟獨特のものであることを豫め承知されておかれたい。醍醐寺本と符合する場合にはその旨を各條注記しておく。

便宜上毎葉漢字の異同を最初に擧げ、次に訓讀の異同を擧げてゆく。

第一紙表　自題號至「古迹」　　寧州襄樂縣尉張文成作　　脫縣字作字

洴隴　作研
西南（ヒツシサルノスミ）　經（イツル）　張騫（ト云シカシコ人ノ）

同裏　自「萬」至「青」

伯禹　作夏禹醍醐寺本注一本亦作夏
縱　作蹤
子細（クハシクモ）

第二紙表　自「壁」至「桃」

云　作曰
罕　作穿
鳥路　作鳥道
潔齋　作結齊
碧潭千仞（アチフチチヒロバカリナル）　古老（フルキチキナヒト）　及（イタル）
錫鉢（ナマリハチ）　何（イツレ）　身體（ミスカタ）

同裏　自「華」至「曰」

華　作花
神仙之窟　脫之字
疲頓　脫頓字

伺候　作祗候
光彩遍レ天（ノイロシ　ソラニ）　浣（アラハヒスル）　窟（スミカ）　投（イタリ）ツイ
片時（カタトキ）　停歇（トトマリイコハム）　聽許（ユルシユルサルル）

第三紙表　自「兒」至「外」

吝　作悋
清河公　公字左傍有墨書二縱線
供給（タマハリモノ）　避（サルモノナラム）ニ　風塵（タモ）ニ　爲（セム）ニ幸（ネカイノト）甚ニ
誰家（カヤカタゾ）舍也　何（ナンゾ）人也　苗裔（ハツコ）

同裏　自「甥」至「須臾之」

少疋　作小匹
婀娜（タヤカニシテ）　逶迤（シタラカニシテ）　輝輝（ニホヘル）　荏苒（ヘエヤカニシ）
畏（ル）ニ彈穿（ハシカウチナムカト）一　參差（シナヤカニモ）　韓娥宋玉（ト云シ男色コノミモ）
絳樹青琴（ト云シ女イロコノミモ）　造次（ニワカニ）　比方（ナラヘナラフ）
須臾（シハラクノ）之間

第四表　自「間」至「漫」

則　作側
憐　作怜　醍醐寺本作憐右傍注怜字

從渠痛不肯　從字左傍注吉也二字

傳語　作傳餘語

自レ隱多ニ姿側一　小絃　若爲怜

渠　求レ天

同裏　自「追」至「無」

雙眼定傷レ　人意　何須　幾許

第五紙表　自「便」至「恒」

合巹　巹字左傍注反切居隱反

有ニ　來意一　書　少　娛ニ　聲　色一

佳期　未ニ甚　關ヒ　懷

同裏　自「嫌」至「出」

怨　作忿

倏々　作倏倏

聞ニ香氣一　聲　文君之面

向來　雙　作　倏倏　横波

第六紙表　自「雙」至「亂」

使南國傷心云々　脫使字

洛川廻雪亦堪使疊衣裳　亦作旦使作遣

韡履　作靴履

雙眉　西施　南國

靴履　忿　念　狂　旅泊

同裏　自「芙蓉」至「相逢」

蓮子　出　相思　未曾　飲ヒ　炭

熱　穿　明月　多事

第七紙表　自「却交」至「難求」

煩惱之下慶安板脫「敢陳心素」四字眞福寺醍

醐寺本竝有

若　作暫

光儀　作光輝

書達之後　達作入

交　煩惱　萬一　向來　眞成

人　渠　姿　首

同裏　自「守」至「留心」

心驚　心作意

著時　著作看
那許　作如許
空知心失眼　失作告
膠漆　漆字作柒
伊　作何
留心　心作情　醍醐寺本亦作情
沉吟（シナケリ）　幽室（クラキヤ）　往還（サマヨヒ）　疎（ウトチラム）
密（シタミカラレ）　投（ナクル）　不レ避（サラ）レ人（ワレ）

第八紙表　自「更」至「非眞」
倡佯　佯作揚
則　作卽
復何可論　復作後
余因乃詠曰　脫乃字醍醐寺本亦無乃字
春（ハル）　有（タモツ）　生前（メノマヘ）

同裏　自「誠」至「兩」
余詠曰　僕詠曰醍醐寺本亦作僕
將詩　作詩將（モテ）

憐　作怜
定是　作必是
匣中　匣作速
靚粧　作盛粧
余又爲詩曰　作余又爲詩詠曰醍醐寺本余作僕
憐（アハレヒ）　渠（ミマイ所）　袨服（コロモ）　履（クツ）

第九紙表　自「邊」至「未得」
浮粧粉　作含粧粉
何　作可
賺眄眼子　賺字左傍注反切可兼反　眄字
左傍注丁念反
錦障（ノカクシ）　艶色（ウルワシキ）　見許（ミルトコロ）　嫂（ウルハシハツカシ）　婷（ニホヒハツカシ）　輕盈（コマヤカ）
賺眄（ミノヘタル）　長長馨（ミトロヌカセリ）

同裏　自「畫匠」至「媚子開」
著　作看
鬱金香　香作黃注「香一本」
腹肛　腹作腸

生（ムマルル）　摸（ウツトモ）　欝金（キララ）　裏（ウチ）　送惑（マトフ）　擢（チナムト）
裁（トトマルコト）
歩歩香（トタタスムトキニカサフリカホル）　風　散

第十紙表　自「靨」至「恰」
織女　織作孅
眉似恒娥送月來　眉作黄（マユツキ）
窈窕　作窈窕
笑　作咲
十娘斂手　手作色
恰　作怜（アハレ）　左傍下注「恰」（アタカモ）
恒娥（ツキオンナ）　忍笑（シタエミ）　嬰娟（ハチシラヒ）　好（ヨシヒ）
稱揚（ホメアケ）　虚（ムナシクイツハレルナラント）　假　何（ナニ）　却入（キイヌル）（イカンシテ）

同裏　自「是神仙」至「狡猾」
謂（オモハク）　凡俗（ワルモノ）　王貌（スカタ）　姓望（モトテ）　在（アル）　住（セシニ）
蜀生（ヒトトナリ）

第十一紙表　自「屢」至「而答」
屢侵邊境　屢侵二字相倒置

央主　作夫主
嫂即太原公之第三女　嫂字左傍注娩（イセト）、公字
右傍注王字
翦　作剪
死守（マテニラントオモヒキ）　嫂（ヨメ）　嫂（ヨメ）　歳年（トシコロ）　家途（ノミチ）　翦弊（チトフシタリ）
從（リシテカク）何　至（リマシツル）

同裏　自「曰」至「不能」
下官望蜀南陽　作下官姓望屬南陽、醍醐寺
本亦有姓字
鼎食　作食斲
淪滑（キカケタリ）　作淪得
衣纓　堂構（ノカマヘ）

第十二表裏　自「免」至「闕」
暫　作蹔
高策　策作弟
沉（メテリ）　非隱（タルニモ）　非遁（レタルニモ）　逍遙（アソヒ）　吏（ツカヒ）　乾煩（イタツキナヤム）
爲ニ傾仰（ナスフキク）一　太平（ヒタタクルヨ）（ヨヤスラカナル）　被ニ賓貢（ラシメラレ）一

同裏　自「內道」至「安置下」

下官答曰　下官作余

比不相知　作比者不相知

料理　料作析

尉參展　料理將安置

第十三紙表　自「官」至「蔽日」

入室　作入堂室

遠客堂謂禮貺兒事接

踈陋進退

第十三紙上欄有頭注曰注云兒十娘自稱也

同裏　自「干雲」至「碧玉緣」

的皪　作滴瀝醍醐寺本亦作滴瀝

浮柱　柱作桂

浮柱長廊椽高閣

照曜魚鱗

第十四紙表　自「陛」至「遣通」

陛　作階醍醐寺本亦作階

通五嫂　嫂字左傍注蘇老反

看看　磣禮罪過自來

同裏　自「亦是」至「腰偏」

則遣　則作卽

十娘共少府　共作與

龍盤　盤作蟠　醍醐寺本亦作蟠

薄　作箔

妍雅　妍作妍

華開　華作花

纈紛散後絡

參屈

翠衫薄奇異驚新鬪

第十五紙表　自「愛」至「雅妙」

笑瞼　笑作咲

奇稀物　稀作希醍醐寺本亦作希

裙　作裾

奇稀比方黑雲兒懷

機關雅妙

同裏　自「行歩」至「眞成好」

娃嬖　作姓嫺

丹羅　作青羅

燕　作鸞

笑向十娘曰　笑作咲

一々（ツクツクト）侍婢（チムナトモ）　綠線（ミトリノイトスチ）　跋渉（ハツチヨク）　行途（イリマセルミチ）

傷（マシムル）　僵俛（アツカラシム）　勞（ハリ）　烏（マラウトカラスノサユツリ）　鵲　語

第十六紙表　自「客來」至「魚腦」

銀繡　銀作錦醍醐寺本亦作錦

八尺象牙床　床作牀

優曇之花　花作華

榻子　榻作摺

豹頭　作豹貌頭豹字左傍下注頭字

席（ミマシ）　客來（ナハリタリト云）　眼（マユメ）　堂（タカトノ）　綠（ノシタミセルカモ）　邊（ヘリノ）　氈

薦褥（テノアリ）　車渠（ノタマ）等　馬腦（ノタマ）　眞珠（ノタマ）

豹貌頭（ハウフ）　榻子（シノミケ）　燈心（トウシミ）

同裏　自「管絃」至「五」

下客　作下官　醍醐寺本亦作下官

笑曰　笑作咲同上

寥亮（サヤカニモ）　分張（ヒラケホトコミ）　交横（マカフ）　列坐（ツラネスヘタリ）　先坐（サイキ）

饒劇（ヒトナフリナリ）　主人母（イヘトウシ）

第十七紙表　自「嫂」至「唇」

五嫂笑曰　笑作咲　醍醐寺本亦同

只恐　恐作畏　醍醐寺本一本作畏

喚香兒　作卽香兒醍醐寺本亦同、慶安板脫卽字

一大鉢　脫大字

金釵　釵作釧（オモノ）注「一本釵（カンサシ）」醍醐寺本作釧

銀盃　盃作坏同上、

蝎唇　唇作脣同上、蝎字左傍注胡葛反

禁（イサムウ）　坐（キル）　香兒（マカタチ）　取（ラシム）酒　金釧（ノオモノ）　銅鐶（ノミミカヌ）

螺（カラスカヒ）　蟀（ヤクカヒ）　細眼（サカツキ）

同裏　自「九」至「些」

光觥　光作兕　醍醐寺本亦同

汎汎　汎作沉同上

九曲酒池　十盛飲器　光觥　庖庖然

鵝項　沉沉　細辛　先投　賤客

斜眼　佯　瞋

第十八紙表　自「頻」至「謂五」

五嫂曰何爲不盡　五嫂之下有問字

顚沛　沛作浦左傍注沛字

五嫂罵曰　罵字之下有言字

無文　文字之下有畫字　醍醐寺本亦同

殺　左傍有刹字敎字

女婿　婿作壻有別注云女夫曰壻

漫　作浪

新婦　何爲　何由　女婿

同裏　自「嫂曰」至「誠」

大　作太

正首病發耶　病作風

本非凡俗　本作元

向來　新婦　太罪過　賢人

第十九紙表　自「如」至「下」

不敢望德　望作忘　醍醐寺本傍注亦作忘

綠竹　有傍注云侍婢名也

憐　作怜醍醐寺本亦同

兒　闕　嬌聲　怜　渠

未ニ相撩撥一

同裏　自「官」至「筆似」

如今乃始　脫乃字

覩　作見

班婕妤　作班婕妤醍醐寺本亦同　妤字下有之字

心膽　面　輪　抄寫

第二十紙表　自「青鸞」至「無」

玉貌　作對玉面對字有傍注云一本無

復能應答　能作多

五嫂笑曰　笑作咲

十娘來語五嫂曰　脫來字　醍醐寺本亦同
恰（マサニ）兒（チノカミ）近來（チカコロ）不レ是（シト思ヨラサラ）漫劇（イタハル）

同裏　自「次第」至「求思」
當作酒章　當作爲　醍醐寺本亦同
奉（ウケツ）敢（カシコミ）洲（ホトリ）樛（マカリ）

第二十一紙表　自「五嫂卽曰」至「曭」
五嫂卽曰　脫卽字　醍醐寺本亦同
又次五嫂曰　作又次發五嫂五嫂曰
笑　作咲
罔極　作冈掾
曭　有傍注云皎也
折（サクコト）（ウナカス）媒（ナカタチ）泣涕（ナムタ）余（ワレ）

同裏　自「日」至「多」
五嫂笑曰　作五嫂咲云
鑿石穿　脫穿字
誠能思之　作識能思之
莫怪　怪作恠

良由得伴　作良由不得伴
思（トキハ）何（ナム）戰（ワナナイシ）兒（チノレ）

第二十二紙表　自「本自」至「免髀」
元來　作由來　醍醐寺本亦同
敎人　敎作交　同上
醯　作醢
熊　作態
兎　作菟
少（ホソラカニモ）（ササラカ）風聲（ウレエコエ）預（アツカリ）唱（ウタ）下酒物（クタシサカナ）
脯（ホシシ）鹿（カセキ）（クシカ）乾魚（ホシウチ）醢（シシヒシチ）荇菹（ササミフキ）
糝（コマヘ）（コナキ）

同裏　自「雉」至「曰若」
犲唇百味　作脣蟹大爪百味
太飢　飢字下有卽字　醍醐寺本亦同
十娘笑曰　笑作咲　同上
雙六局　局字傍注反切云其力反

娘子　作十娘　醍醐寺本亦同
飢　飽　弄　賭　賭宿
若爲

第二十三紙表　自「爲」至「不免十娘」
余答曰　余作僕　醍醐寺本亦同
則共下官　則作卽
十娘笑曰　笑作咲
則胡步行胡步行　作卽胡胡步步行行
免　作寃
惣　作物
賭宿　臥　兒　換作　生
報　去

同裏　自「曰五嫂」至「腰」
娘與少府　娘作浪　醍醐寺本亦同
消　作銷
先須　脫須字

漫語　向前　眼子　盱矚
膃腯　臂腕　捺

第二十四紙表　自「十娘則詠」至「嗔」
快　風流　雛眉　斜眼　佯

同裏　自「曰少府」至「香」
復何　復作亦
新華發兩樹　華作花　醍醐寺本亦同
兒　隱　兒　新歸　兒

第二十五紙表　自「遍一林」至「各著」
兩華　華作花
承聞　摘　貪　兩華　兩枝

同裏　自「一邊」至「太人」
大貪生　大作太
知復欲何如下官　作自知復何如自
來飲食下官
免　作莞
大人　大作太

覓（モトメ）

第二十六紙表　自「專擬」至「薫」

擬和合此事　擬字之下有調字　醍醐寺

本亦同

兒是九泉下人　脫是字

兒（チノレ）明日（アケシ）外處（ノコニ）道（イハマク）加諸（クチカタリ）人流（ヒトナミ）

同裏　自「香滿室」至「蟹醬純」

完　作肉　醍醐寺本亦同

髓　作體（ナツキ）

雀噪　噪作喙

醯　作醢

肥　作肥　醍醐寺本亦作肥

肫　作豚

卵　作殍　醍醐寺本亦同

熊腥　腥作生

羞（サカナ）菜（クサヒラ）瓊漿（ケイ）雀噪（セウ）臛（アツモノ）鼈（カメ）

椹下（クワノミシタ）細（ホソヤカナル）豹（ハウ）熊生純白（ナマシキカスミアソフ　アサラカナル　アサヤカナル　アサララカナル）蟹（カニ）

純（スミ）

第二十七紙表　自「黄」至「具」

鮮繪　繪作鱠　醍醐寺本亦同

五色瓜　瓜作茂

太谷　太作大　醍醐寺本亦作大

具　作彈

黄（コキハヤカナル）蒲桃（ホノエヒ）棗（ナツメ）燉煌（トム）八子（ヤツコ）

同裏　自「論」至「時復」

形跡　跡作迹　醍醐寺本亦同

形迹（ウトンスルコト）奉（ウケタマハヌ）不（シ）覺轉（オホホヘ）眼（メクラ）

第二十八紙表　自「偸」至「由心使眼見眼」

弄　作哢

眼中憐　憐作怜　醍醐寺本亦同

剩　作即　同上

下官詠曰　下官作余詠作答　注一本

醍醐寺本本文作答別注菅家本作詠

舊來　脫來字

兒（チノレ）愛（ウツクシヒ）不覺（チロカミシ）渠（ミマイ所）

同裏　自「亦共心」至「誰能」

亦共心憐　憐作怜　醍醐寺本亦同

譏　作機　同上

意密　密作蜜

一生有杏　杏字傍有注云幸也

眼（メ）上（ウ）兒（チノレ）分梨（ワカル）深恩（キウツクシヒ）一生（ヒトヨ）

第二十九紙表　自「忍榛」至「賭酒」

忍榛　作「榛奈忍（正）（ヒン）（正）（タユレ）」

憐　作怜　醍醐寺本亦同

添　作柒

碁局　局作扃

梨（ナシ）重（タトキコト）意（ツイ）可惜（アタラシム）尖（サキトキ）皮（カハ）

渠（ミマイ所）欲（セントスル）入深（ムツマシク）賭（ノリモノニセン）

同裏　自「下官」至「逢」

復太能　復作亦　醍醐寺本作「亦復」

有一得　得字之下有愚字　醍醐寺本亦同

下官詠曰　下官作僕　同上

道徑　徑作理　理字右傍注一本徑

行跡　跡作迹　醍醐寺本亦同

智者（モノシルモノ）一失（アヤマチ）向來（ムカシ）生平（トコトハニ）圍碁（コウツコト）

第三十紙表　自「人剩戲」至「銅熨」

佯瞋　作羨　醍醐寺本文亦同但注

作瞋

笑　作咲　醍醐寺本亦同

暫　作暫

有一破銅熨斗　脫有字

剩（アマリ）斷絶（タエテ）挑（イトマシム）須（ク）（シ）佯羨（イツハリマメタチ）膽（ハ）

同裏　自「斗」至「筆」

心肚　其左傍有注云六度反指何字不詳

下官詠曰　下官作僕　醍醐寺本亦同

笑　作嗟

喚　作嚶　醍醐寺本亦同

十娘喚香兒　香兒之上有曰字

形勢　生平　冷惡　殘銅　衆人
香兒

第三十一紙表　自「築」至「勸作一」

咷叨　作叫咷　醍醐寺本亦同
塵　作麽
卒爾　作率尒　醍醐寺本亦同
孔丘留滯　丘字之下有則字　同上
梁　留滯　三日　實

同裏　自「曲」至「急行窮」

蓮花　花作華
逶迤　面子　傷　頓　前　似
低昂　斜　婿姑

第三十二紙表　自「奇造」至「霹」

愧　作媿
逢　作會
羅衣　翔　映　天上　後

同裏　自「靂」至「大笑五」

雪　作雷　醍醐寺本亦同
辭　作雒
嗟嗟然　左傍注云虛記反大咲貌
低頭而笑　作咲　醍醐寺本亦同
不是　不作非
大笑　作太咲
兒等　能　采儀也

第三十三紙表　自「嫂」至「不得」

妧媚　右傍注一本嫵字
萬看　萬作万　醍醐寺本亦作万
歌者　上　千處　萬種

同裏　自「判命」至「弄也下」

因詠曰　詠作謝　醍醐寺本亦同
冬天　天作玄（？）
總是　作惣是
命　陪　慙荷　兒　旱

第三十四紙表　自「官答」至「良」

非春　非作飛
翻　作飜　醍醐寺本亦同
十娘譏警　譏作機
知有何處　作「知有誰」　醍醐寺本亦作誰
詠筆硯曰　脫筆硯二字
飜　異同　明年　研
同裏　自「由水」至「十娘詠」
雙翻　翻作飜　醍醐寺本亦同
燕　作鷰　同上
僕詠曰　僕作余
聯聯翩翩　作「聯翩」　醍醐寺本亦同
背　項　攀　脚　太　鷰子
聯翩　萬廻　强
第三十五紙表　自「曰雙」至「謝曰」
酒杓子　脫杓字
頭低則不平　作「頭低剩不平」
十娘詠盞曰　十娘之下有即字
醍醐寺本亦同
巡　酒子　渠　歇　底　翁
同裏　自「十娘詞句」至「婀娜」
到無可　作「無到可」
適　作糅
其園內　內作衷
雜菓　菓作樹
叢花　叢作藂　醍醐寺本亦同
嬌鶯　鶯作鶯　同上
花魴　花作華　同上
銀池　池作沼　同上
學　翻　磴　華魴
第三十六紙　自「蓊」至「映水」
岸柳　岸作崖
笑河陽之一縣　笑作咲　醍醐寺本亦同
余乃詠花曰　余作僕　同上
蓊茸　飈颸　條

同裏　自「俱知笑」至「杏樹嶺」

俱知笑　笑作咲　醍醐寺本亦同

任渠攀　渠作君　有注曰一本渠

意言不勝再　脫意字

過小苑　過作遇（アヘリキ）

梅花　花作華

咲（エン）　蹊（アト）　下（ミチ）　匝（アマネシ）　明（アサヤキ）　歌（コエ）　翠（ミトリ）

第三十七紙表　自「即是桃」至「鳴琴」

梅蹊　蹊作溪

大劒　劒作釼

且　作但

芳苑　苑作菀

露淨　露字右傍有注曰一本霧

生（ナセリ）　或（モシク）

同裏　自「是時」至「十娘面上」

翻　作飛　右傍有注曰一本翻

五嫂則　則作即　醍醐寺本亦同

檮（ソム）　李子（スモモ）　客（マラフト）　元（モト）　偏（モト）邊（モト）

于時（コヨニ）

第三十八紙表　自「娘詠曰問」至「才器乃」

物花　花作華

可憐花　憐作怜　醍醐寺本亦同

拊掌而笑　拊作樹（ウテ）笑作咲　醍醐寺本亦笑

作咲

五嫂笑曰　笑字同上

同裏　自「是曹植」至「何妨五嫂」

今見武功　脫今字

惟　作唯　醍醐寺本亦同

見射雉　雉字之下有遂字

曹植（サウショク）　麥隴（ウネ）　短長（アシサヨサ）　醜（ニククトモ）

第三十九紙　自「曰張郎」至「日落」

好須弩得挽　作「好弩（ムユミク）須（シ）得挽」

則　作即　醍醐寺本亦同

聞君　君作渠　同上

擡頭剩大過　作「牽頭則太過」牽字
右傍有注曰一本擡左傍同有注曰一本垂
醍醐寺本作垂
故　右傍有注曰一本始
衆人　好　投　快　于時　日落
同裏　自「西」至「荳」
盃　作坏　醍醐寺本亦同
忿　作忿　同上
慢　作縵　同上
調謔　曛　且　房室　安置
人　房中　小小　忿々　囊
檳榔　荳
第四十紙表　自「蔻」至「纏」
彩　作綵　醍醐寺本亦同
羅綺　作綺羅
蓮花　花作華
漿　作裝　醍醐寺本亦同

牀頭　牀作床　同上
生　作性　同上
本性　本作體
紅衫窄裹　脱窄裹　醍醐寺本亦脱此二字
綠袂　袂作袜　醍醐寺本脱綠字亦作袜
帖亂　脱亂字　醍醐寺本脱帖字亂作乳
香　帳口　蛩駏　異　妖婬
同裏　自「腰」至「言」
還　右傍有注曰一本屢
天性　天作本
裝　作粧　右傍有注曰一本裝
歛笑　笑作咲　醍醐寺本亦同
累　作擎　同上
髮　作髻　同上
羞嫁　羞字之下有自字　同上
足　粧束　歛笑　繡　梳
盡ニ眉曲　去　邀　女人　招

第四十一紙表　自「語」至「僕乃詠曰」

去來　脫去字　醍醐寺本亦同

笑　作咲　同上

姮娥　姮作恒　同上

怪　作恠　同上

透　左傍有注曰一本遄（ハヤク）

到（キヌ）　狂風（ツシタフレ）　藕（ネ）　漫（シク）

同裏　自「千看千意密」至「腰十」

燐　作怜　醍醐寺本亦同

捉著　捉字左傍有注曰側角反著字右傍有注曰一本盡

把（トツル）　肯（アヘテ）　精神（タマシヒ）　腸（タ）　求守（ヨリツク）

第四十二紙表　自「娘又不肯」至「嗔詠」

障　作鄣　醍醐寺本亦同

故　作强　同上

笑　作咲　同上　右傍有注曰一本嗖

婉轉　婉作宛

腹裏　腹作腸

一遇　遇作過

但若　作若爲（イカニシテカ）　醍醐寺本亦同

當時（トキニアタリテ）　癲狂（テンキヤウ）

同裏　自「曰手子」至「曾經」

雖拒張長又不能免　長字左傍有注曰一本無（一イ无）醍醐寺本

有能字而慶安本脫之

昔日曾經　昔日之下有亦字醍醐寺本亦同

廻（メクル）　鬱郁（ウツイウ）　破（ワレタラント）　自（ミ）

第四十三紙表　自「自弄他」至「被將」

自弄他　自作人（ワレ）　醍醐寺本亦同

并悉從人弄　作「並復志隨他（ヒト）弄」

十娘有一思事　脫十娘二字

道　作導

惟　作唯　醍醐寺本亦同

十娘荅詠曰　脫詠字　醍醐寺本脫

荅字而有詠字

被將　將作持（ウタカ）　右傍有注曰將

曾（ムカシ）

同裏　自「即今」至「親新」

乎章　乎作平　醍醐寺本亦同

下官歛手而荅曰　荅字右傍有注曰一

本謝　醍醐寺本作「下官頓（カタフク）曾而答曰」

憐　作怜　醍醐寺本亦同

完　作肉（シシツキ）　同上

花　作華

繐　左傍有注曰縫衣也

存（メクマハ）

第四十四紙表　自「婦向來」至「裙脫」

專心　脫心字

預　作豫　右傍下有注曰一本預

向房臥　臥字下有去字　醍醐寺本亦有之

韡　作靴　醍醐寺本亦同

掛　作挂　左傍注掛字

然後自與　與字下有十娘二字　醍醐寺本

亦有此二字

解　作脫

勾當（コウタウ）　夜久（フカク）　更（カウ）　情（ロ）　急（タ（？））

兩邊（コナタカナタ）　幞頭（ホクトウ）　裙（アカツキウワモ）

同裏　自「紅衫」至「見可」

袜　作韈　醍醐寺本亦同

花　作華

目　作眼　醍醐寺本亦同

低頭　低作支　同上

拍搦　左傍有注曰背格反女卓反

奶　作妳　醍醐寺本亦同

嚙　作齩

意快　作快意　醍醐寺本亦同

一心傷　作一傷心　同上

癟　作癟　左傍有注曰一本癟

心裏　裏作中　醍醐寺本亦同
腹　作展
華　作花　醍醐寺本亦同
褌（ウハモ）　支（フ）　奶房（テイハウ）　摩挲（テシスル）
髀子（ヒノエモイヌハモモノアタリ）上　痠癖（シユンテイ）　展（ノヒ）

第四十五紙表　自「貴可」至「展邂」
俄頃　頃作項　醍醐寺本本亦同

同裏　自「逅」至「勝侍」
莫閉戸　閉作閉
聚散（アツマリアラシ）　判（サタメ）　斷（タツキキシレルコトヲ）ニ知聞一　多事（イナハナラハ）（イナヘハテ、）

第四十六紙表　自「婢數人」至「臉」
有同心異　異作滅
與娘子拭涙　娘子作十娘
紅桃　桃作排
古來（ヘノ）

同裏　自「新此時」至「分匣」
鶯　作鷽　醍醐寺亦同

弄　作哢
聞道別　道作導　醍醐寺本亦同
禁（イサメ）

第四十七表　自「雙鳧」至「喚奴」
斷　作斷
羊雍　羊作楊
不耕　不作未　醍醐寺本亦同
憐　作怜
龍梭　梭字右傍有反切曰之算反
瞿　作懼　醍醐寺本亦同
笑　作咲　同上　遂字下有咲字
鳧（カモ）　瓊英（ケイエイ）　行（トキニ）
咲
懼然（ツヽラメニシ）

同裏　自「曲」至「十娘幷」
燕　作鷰　醍醐寺本亦同
報詩曰　詩作詠
腕（タフサ）　長夜（キヨ）　枕（フセヨ）

第四十八紙表　自「之贈詩」至「希」

贈詩曰　詩作詠

負局　作扃局

道　作導　醍醐寺本亦同

颯颯　作颯颯

排空　空字右傍有注曰一本空作雲

膽（タン）　團（タン）　希（ネカハク）

同裏　自「君掌中」至「可以」

新樣　樣作檐（タム）　右傍有注曰一本作樣

一疋　疋作匹

時復　復作後

益州（エキシウ）　八幅（フク）　釵（カンサシ）

第四十九紙表　自「掛渠冠」至「而言曰」

一疋　疋作匹

與桂心香兒數人共分　作「與桂心數人共分」

右傍有注曰一本作「子等香兒」蓋如欲置該句于桂心之下

皆白送張郎曰　脫白字

逐浪　逐作遂　醍醐寺本亦同

脫（テトシ）　若（イカン）

第四十九紙表有壞爛總二十二字不明

同裏　自「犬馬」至「審迢」

犬馬何　何作無

心非木石　心作人　醍醐寺本左傍注亦作人

報詩曰　詩作詠　醍醐寺本亦同

道　作導　同上

未審　未作不　同上

怨（ウラムルコト）　處（ロ）　道（イハク）　悠悠（イウ〳〵）

第四十九紙裏有壞爛總二十三字不明

第五十紙表　自「迢度幾年」至「時漸」

十娘詠詩曰　脫詩字　醍醐寺本亦同

崖（カイ）　體（テイ）　翅羽（シウ）

第五十紙表有壞爛總二十一字不明

同裏　自「漸去」至「衣寬」

而去　作「何言」（ナニイカンシテカ　イカ、イハン）醍醐本左傍注此二字

悽傷　悽作棲

鵠　作鶴

去日一何短　短作長　醍醐寺本亦同

來霄一何長　長作短・同上

熒熒（スルスミ　クエイ〳〵）　啼（テイ）人情（ノロ）

第五十紙裏有壞爛總二十二字不明

第五十一紙表　自「朝朝」至「更見」

唇　作脣　醍醐寺本亦同

裂　右傍注燋字

襟　右傍注衣字

兮　作号　醍醐寺本亦同

寸斷（キタ〳〵　ツタ〳〵）　端坐（ウスサニシ）　永結（ナカクトチ）　長吟（チヤウキン）

第五十一紙有壞爛總二十五字不明

第五十一紙裏　自「此兮」至末尾

本文字數總而「此兮惱余心」之五字耳。「余心」之二字爛而不明。末尾署曰文和二年九月廿四日於加州能美郡板津庄今添中嶋大日寺學所書寫畢。

以上のうち漢字の部は慶安板刊本を底本として眞福寺本を對校し、また訓讀の部は眞福寺本のみに見えた獨自の訓を採錄したものである。從つて一語一句に數訓あるものは、慶安板ならびに醍醐寺本と符合するものはこれを省くことにつとめた。わたくしは以下この考勘表が語つてゐる要略を摘記し、さらに眞福寺本遊仙窟が提起し得るところの諸問題について概括的な結語を附し、この素描をして全からしめておきたいと考へる。

（三）

慶安板刊本と醍醐寺本とを對校せしめる時醍醐寺本の誤字はかなりの數に上る。これは嘗て山田孝雄博士が指摘されたところであつたが（醍醐寺本遊仙窟解題　古典保存會影本）今また眞福寺本に於ても同じく誤字の少からざることを發見する。

試みにその著しきものを擧示して見るならば左の如くである。（括弧内は正）

第二紙裏　結齊（潔齋）
同　疲（疲頓）
第三紙表　卑澂（卑微）
同　裏　小疋（少疋）
第十一紙裏　食斬（鼎食）
第十二紙表　高弟（高策）
同　裏　析理（料理）
第十三紙表　迹客（遠客）
同　裏　浮桂（浮柱）
第十四紙裏　妅雅（妍雅）

第二十二紙表　識能思之（誠能思之）
同　莞碑（兎髀）
同　裏　共十娘賭宿（共娘子賭宿）
第四紙表　内哀（内裏）
第五紙裏　忿（怨）
第七紙表　暫得（若得）
第八紙表　後何可論（復何可論）
同　裏　歎斷（欲斷）
同　詩將（將詩）
同　速中（匣中）

第十紙表　嫌女（織女）
同　黄似（眉似）
同　嬪嬪（嬪嬪）
第二十三紙裏　先捺後脚（先須捺後脚）
第二十六紙裏　鳳體（鳳髓）
第二十七紙裏　時後偸（時復偸）
第二十八紙裏　意蜜（意密）
第二十九紙表　碁扇（碁局）
第三十二紙表　媿其廻雪（愧其廻雪）
同　裏　來儀（采儀）
第三十四紙表　飛春（非春）
第三十五紙表　詠酒子曰（詠酒杓子曰）
同　裏　張郎新無到可散情（張郎新到無可散情）
同　銀沼（銀池）
第三十六紙表　峯柳（岸柳）
同　裏　過小苑（過小苑）
第三十七紙表　水湄淮見（水湄唯見）
同　釼（劔）
同　排花（桃花）
同　（苑）（苑）
同　裏　就桂陰（就樹陰）
第三十八紙表　樹掌（拊掌）
第四十紙裏　粧束（裝束）
第四十一紙表　恒娥（姮娥）
第四十五紙表　俄項（俄頃）
同　裏　莫閉戸（莫閉戸）
第四十六紙表　紅排（紅桃）
第四十七紙表　楊雍（羊雍）
同　裏　眉局（負局）
第四十八紙裏　時後一相思（時復一相思）
第四十九紙表　逐浪（逐浪）
第五十紙裏　棲傷（悽傷）

また逆に慶安板の誤とおぼしきものを校合し得るところも數箇條擧げることができる。

例へば第十四紙表の「緣陛」は「緣階」の方妥當なるべく、第十六紙裏の「下客是客」は「下官是客」によりてその意はじめて釋然たるべく、第十九紙表の「不敢望德」は望忘の二字音通なりとはいへ眞福寺本の「不敢忘德」の方一層訓讀に自然なるべく、第二十三紙裏の「娘與少府」云々も「浪與少府」として浪（ミタリカハシク）と訓じたる方明かに文意の通達を覺える。そのほか眞福寺本を以て正しと見得る箇所を一々理由の說明はこれを省略して單に列擧して見ることとしよう。なほ左の如くである。

慶安板	眞福寺本
鮮　繪	鮮　鱠（二十七オ）
雜菓萬校	雜樹萬株（三十五ウ）
奴須弩得挽	好弩須得挽（三十九オ）
羇　綺	綺　羅（四十オ）
綠　袂	綠　袜（四十オ）
息　情	恩　情（四十八ウ）
皆白送張郎曰	皆送張郎曰（四九九オ）

また第十七紙表より裏にかけて、この箇所を醍醐寺本と對校するに醍醐寺本にありては「瘻林之形作

蝎」といふ註が本文に竄入して文意の接續を缺いてゐるが眞福寺本は慶安版と共に此條何等錯簡衍文を見ない。更に第一紙裏の「遺蹤」は慶安板の「遺縱」よりも、また醍醐寺本の「遺縱」よりも遙かに妥當なのではあるまいか。かういふ點から見ても眞福寺本が醍醐寺本より誤字が多いといふだけで低く價値の判斷をする速急は愼まなければならないことであらう。

漢字についてもまた訓讀についても、醍醐寺本、慶安板刊本と一致するものあり或は一致しないものもあり區々ではあるが、概して言へば漢字の方は慶安板と一致しない場合、醍醐寺本と符合するものは枚擧に遑なき程多數に上つてゐる。これは前述の考勘表によつて見ても明かなことである。

字音及び意義に關する注は醍醐寺本に比して著しく少數である。

反切を注してその字音を示したものは左の十一箇條に過ぎない。

第五紙表　　巷　居隱反

第十四紙表　　嫂　蘇老反

第十七紙表　　蝎　胡葛反

同　　螺　力戈反

第二十二紙裏　　局　其力反

第三十紙裏　　肚　六度反

第三十二紙裏　唻　虚記反
第四十一裏　捉　側角反
第四十四紙裏　拍　背格反
同　搦　女卓反
第四十七紙表　梭　之算反

そのほか　韡履（クワリ）（六オ）　參天（サンテン）（十二ウ）　逶迤（ヰイ）（三十一ウ）　等の如く假名によつて字音を示したものも尠くない。そのうちで　蛩（キヨウ）（四十オ）　煢々（クエイ〳〵）（五十ウ）　の二條は韻鏡風の字音として注目に値する。意義に關する注は左の八箇條である。

第四紙表　從　吉也
第十三紙表　兒　注云兒十娘自稱也
第十八紙表　壻　女夫日壻
第十九紙表　綠竹　侍婢名也
第二十一紙表　穀　生也
同　皦　皎也
第三十二表裏　唻唻然　大咲貞

第四十三紙裏　　繾　縫衣反（反切と誤りたるか）？

醍醐寺本の傍注頭注の多數なるに比較するときはこれはまた餘りにも貧少であり、しかも醍醐寺本に施された注が慶安板刊本の注の資料となつたと推定され得る程多くの一致を見せてをるのに比し、眞福寺本の注に於て慶安板の注と一致するものは僅かに第十三紙表「兒」字の注「兒十娘自稱也」のみである。但しこれだけは完全なる一致を見せてゐる。慶安板遊仙窟の注は果して何人の手に出でたものか一切不明ではあるが從來支那人の手に成つたといふ説がある。（幸田露伴氏説、神田喜一郎氏説の如き）しかしわたくしはこの一條を以て推すことは甚だ大膽ではあるかも知れないが慶安板の注は醍醐寺本、眞福寺本或はその他の異本に記された零細な注を基底として、かなり新鮮な學的感覺に惠まれた邦人の注釋者が蘊蓄を傾けたものではなかつたかと考へる。醍醐寺本の注と慶安板の注との多數に上る一致は醍醐寺本の注そのものが、支那人の手になつたものだと論斷してしまへば意味を失ふことになるかも知れぬが、眞福寺本第十三紙表「兒」字の注の完全なる一致は、慶安板注釋者が尠くとも眞福寺本系統の一本を見て採錄したものであつたことを語つてゐる。勿論そのためには眞福寺本の更に底本たりし舊鈔本が慶安板の底本たりし舊鈔本より古いものであることは當然の條件である。或は最少限度、本文は之を措き慶安板の注そのものの作成が眞福寺本、若くは眞本寺の底本たりし舊鈔本より後のものであるといふ假設は充分に必要である。わたくしは慶安板の注が醍醐寺本、眞福寺本のそれよりも遙かに完全であり整備

感を與へる點から推してこれを醍・眞兩本の注記よりは後世的なものだと思ふのである。そしてまた假に醍醐寺本の原注者が支那人であつたとしても、此場合眞福寺本系統の何等かの一本をも見たに相違ないと推定される慶安板注釋者が支那人であるとは考へ得られない。また別の方面から云つて、古く支那に遊仙窟注なる一書があり偶〻醍醐寺本の原注者と眞福寺本の原注者は各その遊仙窟注を見て注を施したものならば、量の上からも質の上からも醍・眞兩本の注に一層完全な一致を豫期され得べきであらう。しかるに事實はこれに反してゐる。そこで私說が容れられるものならば、わたくしは敢て醍・眞兩本の注釋者は勿論邦人であり、慶安板刊本の注釋者は諸本の注を參照し更に拮据して勞を惜まなかつた僧徒の一人ではなかつたかと云ひたい。そして彼は眞福寺本に就いては第十三紙表の「兒」字の注以外何等採錄するところが無かつたのは、他の語句に施された注が採錄するに足るものがなかつたからであらう。それは前揭の注を一覽すれば思半に過ぎるものがある。この聰明にしてはじめて取捨の宜しきを得、また邦人に非ずと誤認される程の業を大成したのではあるまいか。このことに關しては後攷を俟つ要少からずとは思ふが一つの考へかたとして此に疑を存しつつも述べておく次第である。

次に殘されたのは眞福寺本中に湊合包攝された異本の問題である。

醍醐寺本にありては傍注に菅と記された菅家本とイと記された一本（或は數本）によつて對校が行はれたことが察知されるが、眞福寺本の傍注にありても一本若くは一と記された系統の一書と、イと記さ

れた系統の一書とによつて對校が行はれてゐる。全部で二十八箇所、そのうち一本と記されたもの四、イと記されたもの二十三、一並びにイと兩様に記されたもの一である。更に醍醐寺本と一致するものは二十八箇所のうち十三箇所に及んでゐる。今これを順に從つて列擧して見るならば左の如くである。

○第九紙裏　鬱金黄（ヨメハ）香一本
第十一紙表　嫂即太原公（王）之第三女（娘イセト）
○第二十紙表　對玉面
第二十六紙表　談道（一本無？一本答イ）
○第二十八紙表　下官詠曰
○第二十九紙裏　道理（徑イ）
○第三十三紙表　斌媚（嫵イ）
○第三十六紙裏　任君攀（渠イ）
第三十七紙表　露淨（霧イ）
○第三十七紙裏　飛入客懷中（翻イ）
○第三十九紙表　牽頭則太過（擡イ）（醍醐寺本作垂）
同　百放故（垂イ始イ）
第四十紙裏　還投和香（屢イ）
○同　粧束（裝イ）
第四十一紙表　透死
同　裏　捉著（遍ハナノ盡スイ）
第四十二紙表　成笑（喚イ）
○同　裏　雖拒張長又不能免（一イ無）
○第四十三紙表　被特（將イ）
同　裏　斂手而荅（ウタカ）曰（謝イ）
○第四十四紙表　不敢豫知（預イ）
同　裏　痠瘠（席イ）
第四十八紙表　排空（雲イ）
○同　裏　新擔錦（様イ）一疋

第四十九紙表　桂心數人共分（子等香兒一本）（イ）

第五十紙裏　悽傷（トイタミ　マシン　セイシヤウ）（原無括弧）

第五十一紙表　唇裂（憔イ）

右のうち上に符號を附したものが卽ち醍醐寺本と符合するものである。此に留意してよいことは醍醐寺本の前半は專ら菅家本によりて、またその後半はイと記されたる一本（或は數本）によりて對校が行はれてゐる點から見て尠くとも三本を見合せたことが分明である。今眞福寺本を見るにその數は五十四箇所の對校ある醍醐寺本には及ばぬが、しかし一本と記されたる一書とイと記されたる一書とにより同じく三本を對校したことが判明する。且つ一本と記された一書とイと記された一書とが全然別本であつたことは第四十二紙裏「雖拒張長又不能免輸他口子」の條、長又の二字に「一イ無」と兩樣に分ちて注してあるところから考へても確かなことであらう。さてこの一本と稱する一書とイと稱する一書とが如何なるものであつたかはその數が少ないので判斷に苦むが、一本と稱する一書の醍醐寺本に一致するもの三であるに對しイと稱する一書の一致するもの十一の多きに上るところから見て、イと記された一書がかなり醍醐寺に近い系統の本であることは想像してもよいのではあるまいか。それのみならずまた前述した通り眞福寺本そのものの漢字がすでに慶安板刊本よりは遙かに醍醐寺本の方に近いものであることも甚だ興味あることと思ふ。

訓讀は慶安板刊本が最もよく湊合し得てゐる。それにしてもなほ且つ前掲の考勘表にあらはした如く眞福寺本獨特の異訓が豐富であることは蓋し國語學の一好資料たり得ることであらう。勿論わたくしは古い頃の訓讀を啻に國語學の資料とのみ冷やかに見ることを欲しないものである。訓讀が一つの文學であつたことに想到する時漢文の古い訓讀は限りなく貴い。東海の潮の香をとめて響き出づるやまとの歌の調べを箜篌の清搔（すががき）に聞く思があるからである。これはまた機會を得て論究することにしたい。

丙子孟春稿

この貴重な根本資料を自由にわたくしの攷究に委せていただけたのは全く成蹊高校教授丸山二郎氏、名古屋史談會々長中島清一氏、史料編纂所々員玉村竹二氏の斡旋によるものである。附記して謝意を表しておく。